

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

所在	府中市府中町 3 - 2 3 - 1
園名	府中市立三本木保育所

1. 活動のテーマ

<テーマ>

野菜の栽培

「野菜になってみよう」をキャッチコピーとし、「ナス・ピーマン」、「シイタケ、ゴーヤー」を育てる。

<テーマの設定理由>

- ・友だちと一緒に学ぶ楽しさを味わい、協力して取り組む姿勢を育てる。
- ・「野菜の気持ち」を想像し、成長の過程を体験的に理解する。育ち、感触、匂い、見た目等を観察し理解を深める。
- ・調理体験や観察を通して「食べてみよう」という気持ちを育てる。
- ・栽培活動を通して、自然への興味や探求心を広げる。
- ・自分の気づきを言葉で伝える経験を重ね、表現力を育てる。

2. 活動スケジュール

- ・絵本や知っている野菜を出し合い共有する。
- ・苗や原木を観察し、気づきを共有する。気づきや図鑑を参考に何の野菜か予想し、期待を持つ。
- ・野菜の生長に伴い、観察を楽しみ気づきを共有する。
- ・実ができてきたところで野菜の答え合わせを行う。更に育てるための対策を検討、実施する。
- ・生長や収穫を喜び、食べてみる経験をする。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

プランター・ジョウロ、土（牛糞等）、敷き藁、虫よけのハーブ、絵の具、ホワイトボード、サイフォン式水やり、図鑑、絵本、ミストなど

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

【ピーマン・ナス】

- ・知っている野菜の名前を出すところから始めたことで、とても興味を持って参加できた。観察した上で、何の野菜か予想してみると「花や茎の色が紫だからナスかも」という予想出ていた。
- ・実が大きくなり図鑑の写真と比べて答え合わせをする。今後の生長に期待を持つ声が出ていた。
- ・ピーマンの中や畑にナメクジが発生し、図鑑でナメクジについて学び、水分が好きなナメクジがいなくなるように敷き藁をはずすことになった。ナメクジがいなくなり、ピーマンが豊作となった。
- ・収穫後、絵に色を塗り、はさみで切って壁面に貼る。収穫数が目で見て分かり、友だちと一緒に喜んでいた。
- ・保護者参加型でピーマン試食会を実施。素材そのままの味を、親子で食べる体験につなげる。「あまい」、「苦手だけど 2 個も食べられた」、「給食のピーマンと味が違った」と多くの感想が出ていた。
- ・図鑑に「ピーマンは日が経つと赤くなる」という情報があり、本当に色づくのか実験をした。「赤だけじゃなくて黄色にもなるかも」、「獲らないでおいでと色がつくと思う」、「お日様で赤くなるんじゃない？」など様々な予想が出る。
①収穫しない、②収穫して日に当てる、③収穫して日に当てないという 3 パターンで様子を見る。3 週間経過後、赤みが出てきたが色づき具合がそれぞれ違い、毎日ワクワクした表情で様子を確認している。②収穫して日に当てていたピーマンから色づき始めた。太陽側が先に赤くなっていたため、向きを変えて緑の部分を日に当てるようにすると、順調に全体が赤くなっていた。残りの 2 つも少しずつ赤くなっていき、約 1 か月かけて 3 つ全てが真っ赤になった。太陽に当たっていないものも赤くなったことは不思議につながり、「お日様のおかげだよ」、「時間がたったからだよ」という声があった。
- ・赤いピーマンを観察する。収穫したものとしていないものを見比べて、「しわがある」、「つやつやしてる方が美味しそう」という声があっ

た。味の予想は「からそう」、「あまそう」、「にがそう」と様々であった。

- ・緑と赤ピーマン両方を素材の味で味比べを行う。においをかぐと「なんかちがう!」、「緑の方が苦そうな匂いする」と気がつく。実際に食べてみると、「どっちにもがい」、「あまい」、「赤の方が好き」、「緑の方が苦い」と感想を話していた。

【しいたけ・ゴーヤ】

- ・シイタケは原木の塗り絵を作成し、原木から何か出てくるのか、予想と希望を自由に表現できるようにした。
- ・シイタケの生長のためにブルーシートで小屋を作り、霧吹きとは別にガーデンクーラーを使用して、適切な湿度を保てるようにした。
- ・ゴーヤーは長いネットを用意し、1階の庭から2階のテラスに繋げ、子どもたちと背比べが出来るようにした。
- ・シイタケは原木を「なぞの丸太」と呼び、小さなシイタケが生えてくると、「ミニキノコが出てきた」、「クサイにおいがする」、「何か気持ち悪い」と最初は口にしてしたが、日々霧吹きをして大きくなるシイタケに愛着が湧いたようで「美味しそうになったね」、「傘の内側に白い線がある」など声があり、収穫後じっくりと観察した。
- ・ゴーヤーは、雌花の根本が実だと思っていたが、一向に大きくならないことに気づく。図鑑で蜂などの虫によって受粉しないと実が大きくならないことを知り、更に図鑑から人工授粉の方法も学び、実施してみる。数日後見事実が大きくなり皆で喜び合っていた。それから水やりも頻繁に行い、蝶や蜂も蜜を取りに来るようになり、実が沢山できるようになってきた。

〈活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり〉

- ・全体で共有する場では、気づきを言葉にできたことを認めていくと、感じたことや考えたことを積極的に声に出せるようになった。また、友だちの言葉に耳を傾けることができる姿も増えてきた。
- ・水やりの時間やあげ方について子どもたちと考「毎朝9時にグループで水をあげる」と決定した。また、プランターの花が咲いている部分と咲いていない部分の土の硬さを触り、敷き藁を通すと優しい雨のように水がかかる様子を見ることを確認した。
- ・図鑑の写真を壁に貼っておくと、「花の色が同じ」、「葉っぱが同じ」と気がつき、周りに知らせていた。
- ・原木から何か出てくるのか、「なぞの丸太」と呼び、予想と希望を自由に表現できるようにした。絵にすると、子どもたちの自由な発想や期待が広がった。



5. 振り返り

〈振り返りによって得た先生の気づき〉

- ・子どもたちの気づきをきっかけに次の取り組みを考え進めていくことができた。
- ・ピーマン試食会では、子どもたちが保護者と一緒に食べる楽しさを感じることや保護者に応援され食べてみる経験をしたことで、ピーマンへの苦手意識が少なくなったと感じる。家庭では苦手なものは食べない子どもが多い中、目の前で味わう姿や食べようとチャレンジする姿を保護者が見たことは貴重な経験となってよかったと思う。
- ・最初から保育者がシイタケの原木から何ができるのかを伝えず、予想や期待を絵とで表現してから結果を知る過程を行った。ゴーヤも同様に、「植物には受粉が必要」と先に伝えるのではなく、「実が大きくならない」という壁に直面し、子どもたちが図鑑で調べ人工授粉を試み、実際に実が膨らんでいくプロセスを体感した。
- ・「仮説→検証→結果」の試行錯誤を経たことで、単なる表面的な知識ではなく、受粉や原木から菌の育ちなどの生命の仕組みに対する本質的で確かな理解へと深めることが出来た。
- ・親しみのあるシイタケと馴染みの薄いゴーヤという対照的な素材を通し、子どもたちは探求の面白さと命の不思議さを学んだ。子どもたちの豊かな発見や気づきに保育者が驚かされ、共に試行錯誤する「共主体」を深めることが出来た。今後もこの探求の姿勢を大切にしながら保育活動を進めていきたい。